



大分県立竹田高等学校
関東同窓会報

第8号

発行者・会長 後藤鉄石
編集者・足立五郎
発行所・関東同窓会事務所
東京都中央区築地2-7-12
15山京ビル2階205号
03-3543-8747

印刷(株)イフ・フォーラム
東京都新宿区早稲田鶴巻町552
千田ビル302 ☎03-3207-8064

百花繚乱

会長 後藤鉄石

(昭和10年卒)



冬が過ぎて春になるとあらゆる花が咲きそう。最近洋風の蘭なども咲き乱れて見事

織及び広報委員会の状況報告、総務の財務報告等を協議して倦むことがない。企画委員長が発案で総会の運営を年次毎に担当をきめて行うことにして、この企画は当り、変化を生む。この形の運営の第一回は昭和24、25年卒業が担当、皮切りは抽選会であった。第二回は昭和26年卒業が昭和36年卒業と共同担当、竹田の地元と呼応して「竹田を考えるシンポジウム」の新機軸を打ち出した。今年の第三回は昭和27、37年卒業の担当で又々新しい企画を練って下さる由、楽しみにである。

念のため申し上げておくが、総会も年々拡大する計画は必要ない。年々拡大することは、いすれ息切れして続かないこと明白な理である。担当年度は、それぞれ実行可能な線できいと考えて欲しいものである。

組織委員会が栗生委員長を中心とし、

同窓会組織の拡大教科に当り、各卒業年次に亘る最大多数の委員を擁し、次の課題としては女性の組織委員を獲得して女性の積極的参加を画策する計画と聞く。今後の成果を期待する次第である。

広報委員会も足立五郎委員長の下で、「臥牛」の年2回の発行を行っているが、同窓会メンバーの意思の血脈として全般的動静をよくつたえ、且つ参加原稿も逐年増加している由を目をみはる思いがする。是非積極的に投稿したり利用したりして貰いたい。

総務委員会は、得丸委員長の下で同窓会の経理、及び財政の基幹を始終掌握してその発展につとめてこられた。感謝に堪えない。財務委員会は総会受付に尽力されたが、総務委員会に統合する計画が進行中である。

いずれにしても、関東同窓会がこの様に着実な歩みをして御同慶に堪えない。会の姿はまさに百花繚乱である。

竹高関東同窓会総会へのお招き

郷土の新進落語家も出演

徳丸 正哉 (昭和27年卒)

故里のなまりが恋しくて、停車場にまで出掛けた詩人もいました。そんな豊後言葉がぞんぶんに聞かれる竹高関東同窓会が近づきました。いつものクラス会とは違った懐かしい顔ぶれにもお会いできますし、竹高の校長先生も来られます。

今回は緒方町出身で、間もなく真打ちに昇進が期待されている新進落語家・柳家さん好(昭和55年卒)さんが、アトラクションに出演してくれることになりました。ふるさとより直送のお土産も用意してあります。是非とも皆

今年には明治の作曲家、滝廉太郎の没後九〇年。それを記念して、彼の短い生涯を映画化する東映「わが愛の譜(うた)・滝廉太郎物語」(沢井信一郎監督)の主演に、このほど風間トオルが決まった。

風間トオルが滝廉太郎に

没後九〇年を記念、映画化(八月公開)

今年には明治の作曲家、滝廉太郎の没後九〇年。それを記念して、彼の短い生涯を映画化する東映「わが愛の譜(うた)・滝廉太郎物語」(沢井信一郎監督)の主演に、このほど風間トオルが決まった。

名曲も使用される。

滝廉太郎(一八七九—一九〇三)は、近代日本の西洋音楽作曲家の第一号。十六歳で東京音楽学校(現・東京芸大)に入学し、「花」「荒城の月」など数多くの名作を作った。その後、ドイツに留学したが、肺病に冒されて一年で帰国。短い生涯を閉じた。

映画は彼の青年期に焦点を当て、文豪・幸田露伴の妹である音楽学校同窓生の幸田幸との恋愛などをからめて展



先輩を訪ねて

お客さま

とき

ところ

聞き手

山口 立機
令室泰子様同席

平成五年四月一日

山口様御自宅

足立五郎

——早速ですが健康のことからお伺いいたします。目がお悪いそうですが。

山口 ええ、左は殆ど見えないうです。眼底出血のくり返しによる網膜剥離で、昭和四十三年ごろのことです。九大の眼科部長に診て頂いてこれはダメだと言われました。大変な時期で文字通り目の前が一時真っ暗になりました。運動不足は却って体力の減退を来すのでゴルフを始めたところ更に悪くなりました。今は明るいかなあ程度には見えます。

——御不自由でしょうね。でもお若くて健康そうですが。

山口 左眼を失った後、残った隻眼で開き直ることにしました。元々本性高血圧症ですが、憤慨するようなことがない限り大したことはありません。ある程度の病氣と同居し、仲よく付き合うようにしています。後は妻の生活管理のお陰かな。それもカロリーがどうかではなく、色々な物を万遍無く食べて来たことが良かったのかも知れません。

——竹田中学校在籍は二年生までですが、特に記憶に残っていることにどんなことがございますか。

山口 あの頃は特に記憶力が良い時間でしょうね。殆どの級友の顔を覚えています。また、当時の先生は勿論、上級

生が偉く見えた感覚が今でもそのまま残っています。当時の竹中は、テニス・剣道・柔道等スポーツの黄金期だったんじゃないでしょうか。私はテニス部の末輩で、ダブルスの後衛でした。

学校には兄と一緒に下駄ばきで通いました。町の手前の知人の家で靴に履き替えて、底の減りを防ぎました。

——私どもの時は、その靴がありませんでしたよ。軍関係のことは一時間や二時間ではとても伺い切れません。そこで終戦の時のご苦労についてお話しください。

山口 終戦の報を聞いたのは、ビルマでまだ作戦の真っ最中でした。どう



山口 立氏 略歴

大正二年竹田市大字三宅生。昭和三年大分県立竹田中学校卒業。東京陸軍大学予科、四年卒業。陸軍少佐。終戦時、第二師団第四旅団司令部付。戦後、復員。四年、大分県立竹田高等学校教員。六年、大分県立竹田高等学校校長。十四年、大分県立竹田高等学校校長。十六年、大分県立竹田高等学校校長。十六年、大分県立竹田高等学校校長。

いました。

——そう思われたエピソードを一つ山口 そうですね。私達はいわゆる捕虜(POW)ではなく日本降伏軍(JSP)という名で遇せられました。これは「名誉」の問題であって、JSPだから有形的待遇が良いということではありません。ある時、勤務中の兵士がイギリス軍人に殴られました。事件を知った師団長は、「一つ殴られたらそれ以上殴り返せ」と命令しました。このことがイギリス軍にばれて、師団長は収監されました。しかし、調査の結果イギリス人が先に殴ったことが分かったと、直ぐに釈放され先方の態度も是正されました。

——一番困ったことは？
山口 一つ部隊を帰還させ得るか分からないことでした。また、船が来ても全員が乗れるか分からないことでした。そこで部隊毎に帰還の順番を決め、将

兵の心の安定を図る施策がとられました。結局、終戦後三年目に予想以上の船腹が充てられ、一度に帰ることができました。

——復員なさったのは昭和二十二年ですね。それからが大変だったのではないのでしょうか。

山口 全く陸に上がった魚でしたが、



復員軍人がしていた文房具会社の荷送り送業の仕事から始め外廻りの仕事もしました。しかし、だんだん本職達に復員して来て仕事を取られるようになってきました。そこで友人から拾万圓借りて荻窪の駅前に文房具店を開きました。

最低限的な売り上げを得ましたが、昭和二十五年に警察予備隊ができた二十六年に私も追放解除されましたので、自分の適職は武職だと思い入隊しました。

——自衛隊時代の昭和三十五年には、アメリカ視察に行かれたそうですね。

山口 自衛隊では主に教育関係の仕事をしていましたので、軍関係学校の視察に参りました。そのころのアメリカは意気盛んで、規律も良く特に装備に優れ、これは負ける筈だと思えました。帰国後、すぐに役立つことが多く、実り多い視察旅行でした。

——母校の施設充実に尽力なさったのは、福岡の師団長時代ですか。

山口 ええ、結果としてお役に立ちましたというのでしょうか。第四師団の副師団長と師団長として福岡には合計

五年間程勤務しましたが、この頃、自衛隊の施設力を以て民生に協力しようという機運が高まりました。地方の工事を、材料費等実費だけ払ってもらって訓練として工事を行い、従って後の工事費はただという「部外工事制度」ができました。各地から来た申請の中から優先順序を決めるのですが、竹田は、自衛隊の応募が良かったことと、師団長の出身地だからということで意志の疎通も良く、又他からの申請が少なかったこと、国体開催の関係もあって竹田には比較的多くの工事が割り当てられました。竹田高校の奥のグラウンドを整備する時は大変でした。爆破の際、岡城に通ずる道路上に崖が崩れる虞れがあるので、爆薬の量に神経を使ったと担当者が言っていました。

——退官後の住友商事顧問は分かりますが、高千穂学園の幼稚園勤務は意外な気がしますが。

山口 住商退職後、高齢者職業相談所に登録していたところ、高千穂学園で事務を募集していると知らせがありました。私は図書館の仕事がしたかったので応募したら受かりましたが、幼稚園に行くってこれというところで、正直迷いました。このころは、ちょうど学園紛争の影響もあって扱い難い保母もあり、若い園長は才媛ながら抑えがきかないので私にその補足を望んだようでした。六年間おりましたが、園児教育の重要性を痛感いたしました。

——長時間有難うございました。ますますご自愛下さいませようお祈り致しております。

ふるさと便り

久住高原くたみ太鼓

上野 六枝

(昭35年卒)

関東同窓会の皆様におかれましては、益々御清栄のことと存じます。

私の住んでいる久住町は、皆さんも御承知のことと思いますが、九州のほぼ中央で、大分県の西南部に位置し、地形は久住山・大船山を主峰とする一七〇〇に級の山群を北にひかえ、その南麓に形成された山麓になだらかな高原が広がり、標高四五〇から九〇〇の間に耕地と居住地が混在しています。台地型高原地帯で、北は九重町・東は直入町・南は竹田市・西は熊本県産山村にそれぞれ隣接しており、東西一五・九、南北一五・六、周囲六二・三、総面積は一四二・五八平方、の風光明媚な高原地帯です。

この壮大な高原の六七〇を総勢五三〇人の人々で昔ながらの野焼きを三月中旬に行い、春の息吹を感じている今日この頃です。

我が町では、この高原のリゾート開発と来年のボーイスカウト第十一回「日本ジャンボリー」の開催にむけ、町をあげてとりくんでいます。当町の人口は五二〇七人(二月末)で、過疎化の波は続き、若年層の流出と高齢化の進行はすさまじいものがあります。

その中で町の活性化の一端として、三年前自主的に結成した女性だけの「くたみ太鼓」を紹介します。若者は都会へ都会へと出て行くが、ふる里を守る後継者は農業(畜産・野菜)の経営を営み、その家庭へ嫁いでくる女性達にとつての憩いの場として、あるいは町の伝統芸能を復活させるため、女性だけで太鼓愛好会を結成。現在では、久住高原まつり・文化祭など町のイベントや近隣の市町村のイベントにも大活躍です。

このくたみ太鼓は鎌倉時代、菅原道真が朽網にさしかかったとき、ついでに竹の杖を逆につきたてたところ、そのまま根を生やしてしまつたという「さかさま竹の城」といわれている山野城で誕生しました。この城を築城したのが朽網氏で、太鼓の創始者は齋院親能といわれています。この地方を、

までも朽網(くたみ)といい、現在の久住町郡野地区です。

天正一四年(一五八六年)の島津軍の進攻をはじめとした戦いの場、所領四〇町といわれた農地の収穫の祝い、五穀豊饒の祭りなどにおいて、兵士の意気をあげ、収穫を喜び、豊作を願った人々の気持ちをこめ、「くたみ太鼓」をうったといわれていますが、これを女

母校思い出すま、

本部事務局長 波多野 英次

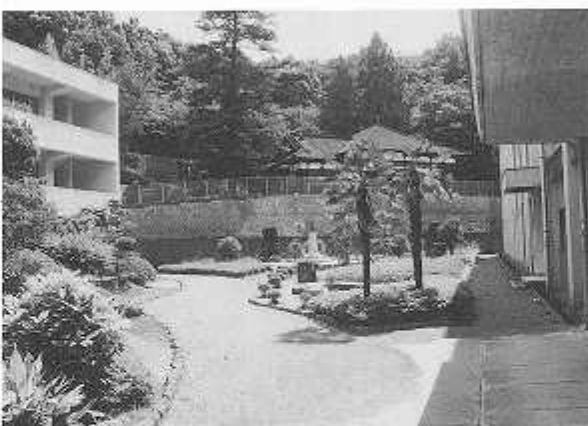
(昭28卒)

関東同窓会の皆様で活躍と存じます。母校の発展は願ひであります。それを語るには若干難しい面があります。よく言われる、コップ半分の水を、もう半分しかない」とみるか「まだ半分ある」とみるかで認識はかなり違います。現在の竹高の評価はかなり高いと思います。赴任して来た先生が「竹高生は真面目に努力する」と口にされるのもお世辞ではないようです。学校が安定しているという面では、県内でも一、二ではないかという面もあります。

唯、関東からと言うか全国的にみて竹田高校が見えてこないという面があると思います。前年度インターハイ等の全国大会に出たのは山岳部と弓道部でした。九州大会等の各部の活躍はそちらからは見えにくいと思います。又、東大だけが大学ではありませんが、入学者が絶えて久しいのも確かです。(逆に関東同窓会からは東大も普通の大学だよ。頑張れの声が聞こえてきそ

性達で復活させました。今日も、明日も太鼓の響きが山々にこだまするようです。遠くより郷里の響きをお聞き下さい。そして、久住の自然と文化にもふれてみて下さい。

終りに関東同窓会の皆様の御健勝と御多幸をお祈りいたします。



うです。以前にも申しましたが国私立を問わず関東の大学そのものが難関となつています。その反動か最近若手地方の大学もレベルアップしてきました。ただ少ない受験者に対する合格率の面は県内でも上位にあります。

昭和25年に私は竹高に入学しましたが、その頃一学年は一体何クラスあつて同級生と言える人は何人いたのか全く判りません。今、文部省が提唱する総合制高校が当時の竹高だったと思えます。普通科・生活科・商業科・工業科・定時制・久住分校・長湯分校と通して

数えれば一学年が十数クラスになる筈で高校生はその三倍の数になります。

現在の竹高は各学年五クラスの小さなまりした高校になりました。施設設備は申しぶんありません。昔、地震研究棟といつて何人かで揺らした木造校舎はありません。前からある建物は現在の柔道場くらいなものです。小野ボン先生より昔、四千円で建てたと聞いた事があります。私事です。私の父も旧制竹田中から新制竹高にかけ国語の教師をしており、忠男と言う本名より「おぎんさん」と言うアダ名を言ううと、それは聞いた事があると言われる先輩がおります。

本部同窓会副会長で竹田印刷の山南社長さんからは、お前は「おぎんさん」の子供だから「おぎん」だと言われ、る事もあります。現在の高校生はリーダーやゼントルマンになったのか部分的なグループで通用するアダ名はあつても、全体的なものはありません。昔の講堂(今の剣道場)前の掲揚台(竹中の校章入り)と旧校庭から上がって行く石段は残っています。以前二六会の先輩と校内を回った折、上品なお姉様が石段にビョンと立って「運動会のあとこの位置で写真を撮りました。」と云われましたが、一瞬その方が女学生が立っている相に感じられました。私も何十年前前にタイムスリップしていたのでしよう。

本年四月には本校同窓の尾西陽一が赴任して来ました。竹高も益々発展していくものと思えます。では関東同窓会の皆様お元気で失礼します。



クラス会

最後の女学生

甲斐 智津子

(旧姓板倉・昭27年卒)

春のうららかな日ざしのもと、岡城桜まつり・姫行列が例年のごとく持たれていました。

卒業式、入学式などの季節になると学生時代が思い出されます。私達昭和二十一年入学の竹田高等女学校の梅組のクラス会が四月五・六日にありました。残念ながら桜まつり直後でしたが、この季節に市内観光・散策、バスチャーターをしての久住高原・湯布院・大分・別府などの観光を、若く夢多き梅組時代の三年間の級友と共にできたことは大へん楽しいことでした。

私達は戦後昭和二十一年に竹田高等女学校に入学、学制改革によって竹田



高等学校併設中学校卒業生として、竹田高等学校に地方の新制中学校の生徒たちと入学しました。

これまで、少人数で、横の関係とか縦の関係—例えば竹田会・稲葉会・関東同窓会・竹青会など—の集いに参加したことがあります。今回は最後の梅組がもった水入らずのクラス会です。昭和二十四年に卒業以来四十四年ぶりの再会です。クラス主任であった西村俊彦先生、橋爪春海先生を迎えて還暦を記念して持たれました。なんと約四十人もの参加で賑わいましたが、集合の際、同じ列車で前にいながら知らん顔、すれちがっても気がつかずで、後で笑いくさになった次第です。話題もごく普通の同年輩のそれと同じというのも感慨無量でした。若かりし女学生時代から一気に年輪を重ねた熟年時代にタイムトンネルをくぐってやって来たわけですから、小さかった人も大きくなり、全ての面で素晴らしい変りようです。クラス会(同窓会)は親睦と情報交換の場であり、お互いに高め合い助け合う仲でありたいものです。そしてまた、これから明るくしっかりと生きて行く糧となることでしょう。

例えば、敗戦直後の我が国は、衣食・住の面からも物資が極端に不足して学習に必要な教科書も満足なものとは

関東37(みな)の会

桃溪 謙次郎
(昭37年卒)

関東地区における竹高昭和37年卒の「卒業30周年記念同窓会」は、平成4年11月7日(土)日比谷パレスにて行われた。これが大都会東京のまん中かと思うほど静かな緑の木々に囲まれた会場で、同窓



なく、英語の教科書なども新聞紙のようなものに印刷して綴じただけの簡単なものでした。それでも目を輝かせて勉強して、すし詰め列車にもめげず、下駄ばきの汽車通学でした。アルバム等なかったもので、それに代わるものとして今回の還暦記念誌「梅花永久」に香りにて地元の淵野洋子さんらの手によって出来たのでした。

お天気にも恵まれ、元気で参加出来たなんて! この会も永久に!

49名はそれぞれに久しぶりの再会をなつかしみ、会場の中は熱気にあふれた。私達の同窓会は、今回のように大々的に集まって行うのは20周年記念以来である。これまで会社の仕事や子育てに忙しく、余裕がなかったせいもある。ここへきて子供も大きくなり、手がからなくなると金がかかるという状態ではあるが、何とか自分の時間をもてる状態になったことなのか、自然発生的に同窓会の音頭とりが出現し、今回の同窓会にこぎつけたというわけである。前回と同窓会が離れていたこともあり、銀座での二次会、新宿での三次会と夜の更けるのを忘れての大騒ぎ、ストレスを発散した。

私達は今年大半が50歳となる。昔は人生50年であったが今は人生80年といっても過言ではない。これから30年は生き続けなければならぬ。これまでの30年は若さで突っ走って多少の無理もきいた。しかしこれからは体のどこか一箇所は悪いところをかかえる年代で、今までのように体も動かない。前方にはこれまでよりも、苦しみや、悲しみや、寂しさが限りなく待ち受けているような気がする。

そこで私は、同窓会というものが単に昔を懐かしむだけのものではなく、もっと積極的に生きていくという意味でこれからの生きがいの一つになってくれればと思う。気のあった者同士でゴルフや釣りやカラオケ等を楽しみ、人生を語り、お互いに励まし合って生きて行くような仲になっていくことを理想と考える。

このためには同窓会は永久に続けねばならないと考え、このたび幹事をクラス輪番にし、213年に一回は開催するようみんなでルールを敷いた。そして会の名前も「関東37(みな)の会」と名付けた。

さて、関東同窓会はいままで私達若者(?)にとって、出席してもお年寄りの集まりというイメージが強く、出席しても知らない人達ばかりで面白くなかった印象がある。しかし、懇親会の部を各卒業年次が順次順番に担当することになり、いろんなアイデアをもって会を変えようと努力を始めたのは大変前向きであるし、今後の発展を感じさせる。今後、各卒業年次の幹事が力を合わせ縦と横のつながりを密にし、益々盛会になっていくことを望むものである。

医療法人社団無門会

小代歯科医院

理事長 小代基昭

(昭和45年卒)

(診)千葉市稲毛区小中台町274-3

電話 04-3-255-3351

会員の語らい

わがふる里竹田

見玉 亮

(昭45年卒)

三月十八日帰竹すべく、昨年も利用した十八時二十分発の特急寝台富士を待っておりましたが、時間が来ても列車が入ってこないのが駅員に聞いたなら、「もう五時に出ましたよ。」とのこと。

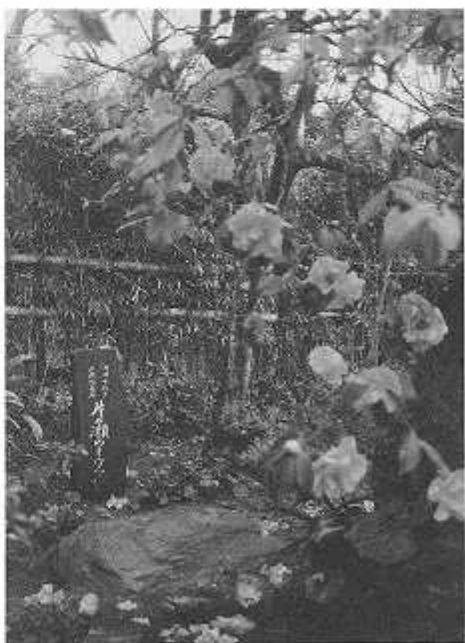
三月十八日よりダイヤ改正で、新しい時間になっていくのに気付かず、新幹線ひかりなら名古屋まで追いつけるとのこと、慌てて名古屋まで行き、やっとの珍道中で帰竹することが出来ました。

こんな思いをして竹田に帰るのには私事で恐縮ですが、竹田市片々瀬の我が家には、昔新築祝いに画聖田能村竹田先生から贈られたと伝えられる、中国雲南省原産の天然記念物の「唐椿」が育成した花の径十二釐位の大輪の濃いピンクの花が咲き、三月末から四月いっぱいが見頃で、椿の愛好家が毎年千人位福岡県や別府辺から我が家を訪れてくるからです。

私は在東京なので普段は不在で閉めて留守をしており、花の季節だけ三重町在住の姉が十年來我が家に来て、花見客の接待をして呉れています。先代までは一般公開していませんでしたが、私の代になって開放しましたところ、毎年訪れてくる人も多くなり、すっかり有名になってしまいました。普段は荒れほうだいの庭も、そのため春になると庭師を入れたり、人を雇って手入れに大わらわ。姉も次第に齢をとり(八

十三歳)、大変だから帰って来て手伝えとのこと、私も毎年帰竹して姉と庭の手入れをして来客に備えている次第です。

来客があれば、姉は茶菓を出して持て成し、たまに客が茶代でも置こうものなら追かけていつて返しています。毎年見える方の中にはお茶菓子を持参される人もいます。これは田舎でなけ



それにもう一つ竹田には、岡藩時代長崎より亀山焼の陶工を招聘して、小富士村の小宛にて焼かせた小宛焼と云う(竹田先生も絵付されたものもある)、非常に秀れた焼物があり、少々調べてみたいと資料集めの仕事もあり、これは後日機会がありましたら発表させていただきます。と思っています。



母校の思い出

江崎 和彦

(昭28年卒)

私が母校、竹田高等学校西校舎(旧制竹田高等女学校)に、「希望」より「不安」な気持ちで入学したのは昭和二十五

年の春である。活字に飢えていた十五歳の少年にとっての最初の驚きは先生の張りのある声であった。従って言葉

第21全国菓子大博覧会
三笠宮名誉総裁賞受賞
登録商標 荒城の月 登録商標 三笠野
御菓子司 自由堂
(有)川口自由堂
本店：竹田市駅通り ☎ 0974-63-3258代
FAX 0974-63-3549
国道店：国道57号線梓田原 ☎ 0974-63-3260
大分店：大分市牧(西萩原バス停前) ☎ 0975-56-0121

が全て新鮮に聞こえ、心を打った。

特に木村先生の「……ついに新しい詩歌のときは来たりぬ。それは、美しき曙の如くなりき……」等は、私のこれから的人生に明りがさした思いがし、好学の士を気取ったものである。二年生、三年生は、東校舎(旧竹田中学校)で唯、勉強ばかりの思い出しかない。特に、不得意の英語の小河先生の思い出は、今でも時折、教室の情景と共に夢に出てくる。「アイ・ソウ・ア・ソウ・ア・ソウ……」あまりの不出来に、K君を誘って校門の近くのアメリカ人姉妹宣教師について学んだ。又、漢文が読めず、とうとう横道にそれてK君と頼山陽の詩を吟ずる事となった。

時には、詩を「魚住の滝」に向かって叫び、己れの声が滝の音と、水しぶきで打ち消された思い出は、勉強のストレス解消にはもってこいであった。母校での思い出は、良き師、良き友と

の出会いであり、敗戦という大事件の直後の、己れの道が定まらない時、師伝、師承しかない毎日の中にあつて私を勇気付け、励まし続けてくれたのは、竹田高校を取り巻く自然環境であった。四季折々の生きもの、草木の変化、花のうつろい、きれいな空気、特に入田の湧水群(泉水)は私の心の友でもある。先日、「泉水魂」について友と語り合い、高校三年間は、純正清酒の仕込みの時であつたということは意見の一致をみた。二八会の「わが、わが」とは、時折、醸成の味の具合を味わっているが……。

昨今の政治家や経済人の悪行の数々、「泉水魂」で浄化されてたらしめたいという昨今でもある……。

かつて三木清は、「読書と人生」で次の述懐をしていた。(後藤是美先生から教わった)「一般的教養も、専門によって生きてくるもので、専門のない一般教養は、ディレクティブイズムにはならない。」

母校は、祖父達も学んだ木造であつた。今の私の家は、コンクリート造りで、小さな庭らしいものはあるが、東西はコンクリートに囲まれた牢屋である。今、母校を語ることはコンクリート造りでない、少しばかり加工した木造の教室の安らぎを語ることであり心が和む……。

私の思い出の中の母校は、さまざまあり、母校を語る時は、故郷へ、戻れて楽しい。美しい故郷を語る時、私は青年に戻る。

会員の語らい

オペラ修業「ミラノ編」

吉原 佳子

(旧姓倉原・昭53年卒)

なつかしの母校竹高を卒業してちょうど十五年の節目、そしてここミラノに辿り着いて二度目の春を迎えました。この三月十一日には三十三歳の誕生日を、こちらで巡り逢った愛すべき友人(四分の三がイタリア人)三十三人が、ミラノに一八九九年からあるイタリア老舗レストラン「ジャンニーノ」の大サロンドでディナーコンサートを企画してくれ、忘れられないひとときを過ごしました。

もしも助っ人に支えられ、コンサートは予想以上の盛り上がりを見せました。涙と笑いと喝采の渦！

由緒ある超エレガントなポストとあって、特に女性陣は十日も前から何を着ていくかでもう大変。さすがそこはミラノファッションの宝庫、それに日頃私が母のように接しているMARI Aはミラノの知る人ぞ知る最高の(品質と良心的価格、抜群のセンス、決してお世辞は言わずその人にピッタリと合った物を出してくるのです)ブティックのオーナー。そして女性陣のほぼ全員は彼女のとりこ、みごとでした。誰一人としてかち合いませんでした。

中央が吉原佳子氏



私にいたっては、手持ちのブラウスに合うスカートがなく、彼女は何と一夜でデザインして仕立ててくれたのです。もちろん、男性陣も決めてくれました。それぞれの仕事を終え、さつそうと着替えてアペルティボ(食前酒)をはじめ皆がそろったところで、我が誇らしい同僚二人の「椿姫」乾杯の歌でパーティの始まり！ オーナー思案の末の極上料理が進み、フルーツに至ったところでコンサートのはじまりです。

先頭バッターには私。いつの日からか誕生日は、自分をこの世に送り出してくれた母に(もちろん父のその功績も大きく、いえ必要不可欠であったわ

生家から久住連峰をのぞむ



故郷の思い出

渡辺 正治

(旧姓足立・昭10年卒)

我が故郷・小富士村は、滝廉太郎の名曲「荒城の月」の岡城で知られる豊後竹田の隣村である。城の主閣跡から南方を見ると、片カ瀬の台地の彼方に、山容が富士山に似た小山が見える。第十代の藩主中川久貞公によって「小富士山」と命名されて村の名称となった。その山頂にはご本人のお墓がある。小学校時代には幾度も遠足に行つたものである。

私の生家は、その片カ瀬の東方・草深野の台地にある。岡城の天主閣跡に立つて東方を見ると、生家の生け垣が見える。残念ながら家は見えない。生け垣が高いために、それとも家が低いために、兄弟でくだらない論争をしたことがある。結論は両方であるということとで幕になった。少年時代の兄弟喧嘩も、今は懐かしい。

家の前を昔の往還(昔の幹線道路)が通り、子供の頃まで石畳の道が残っていた。その昔大勢の供をつれた藩主が、参勤交代等の時ここを通ったのかと往時を偲んだものである。

この台地から四方の山々を見渡す眺めが、田舎で唯一つの自慢であった。東方約二十*の地域には、七百*級の三国連山が横たわり、南方には宮崎県境

●お食事
宴会・宿泊に



HOTEL
岩城屋
IWAKIYA

〒878 大分県竹田市坪田原161
☎(0974)62-2211代

の傾山・木谷山・祖母山等千七百*級の九州山脈が連なる。更に、西南の彼方には阿蘇の山々・根子岳・高岳・中岳が望まれ、その噴煙が流れる北西方には、久住・大船・黒岳の九州最高峰が聳え立つ。その間を繋いで阿蘇外輪の波野高原から久住高原まで、真つすぐな地平線である。北方には、二十数*の地域に烏帽子岳・鑑力岳の山々が連なり、天気の良い日には、神角寺山の遙か彼方に豊後富士(由布岳)の姿も見えることがある。

詩人北原白秋は、この景観を、

草深野 ここに仰げば くにの秀や
久住は高し 雲を生みつつ

と読んだ。
この歌碑は、どういう訳か久住町にある。

会員の語らい

ふるさと竹田に帰って

仲村 睦雄

(昭和20年卒)

約四十年間の空白ともいえる郷里での暮らしを始めるについては「ゼロからのスタート」ときめ「ふれあう」ことを第一に考え、早くも一年になろうとしている。

幸いにして多くの方々の温かい心につれ、漸く足が地についてきたかなと感じ始めている。感謝の外はない。

さて、「竹田を知ろう、竹田を楽しもう」と動きまわる中で、教育新聞大分支局長、ロータリー会員、生涯学習の町づくり推進委員、岡の寺ガイドブックづくり、そして無形民俗文化財の保護振興のための「里の賑わいをおこす」人々と共にとりくむ中で、市政四十周年を

やがて迎える竹田の人々は、その成果をどう評価するのだろうか、これから竹田はどう生きていくのかに、私の関心が高まるのを覚える。

帰竹して驚いたことに、すでに竹田が、文化面で全国発信をしていたことである。早速、私は教育新聞本社に、全日本高校音楽コンクール、童謡コンクールのことを発信すると、第一面にとりあげてくれた。地域のエネルギーを感じとってくれたのであろうと思う。

前者については、ウィーン短期留学の賞までついているのである。

「地方ではない。地域だ。」の心意気が窺える。竹田の人々が真に願っていることは何なのか、深く思いをいたし、

黙々と汗を流す方々と知り合うことができたことは大変幸せである。

私は、文化財・文化遺産にかかわる第一歩をふみだしているのだが、これらの方々の不退転の心と「時は金なり」とする心意気と、後世の人々につたえようとするなみなみならぬ努力に、深い敬意と同時に、これらの方々とふれあい高めあうようこびを、この上なく大切にしていきたいと思う。

最近、岡城址は竹田の方々の営々たる努力によって、とみにその雄姿をみせてくれるようになってきている。その姿は、さらなる潜在する巨大なエネルギー

竹田ゆかりの店

「ちくでん」

中央区八丁堀のビル街の一隅にあるこじんまりした、天婦羅・小料理の店「ちくでん」。

店主の森田 正さんは玉来出身。奥様の理恵子さん(旧姓 吉野理恵子さん)は松本の御出身、昭和四十五年卒の同窓生。

屋号の由来は、なる程とうなずける。田能村竹田。また竹田をちくでんと読むことにちなんでのこと。

故郷竹田を誇りにしておられることが、店の中に大きく飾られた岡城址の



を感じさせずにはおかない。この岡城址の姿を、今の竹田の老若男女に重ねあわせて秘めたる巨大なエネルギーをみる事ができる。歴史をひもとけば、苦難にめげず克服した時代が竹田の歴史の中に数々ある。また、巨大なエネルギーを感じとり、世界に冠たる「荒城の月」という天主閣を建てた滝廉太郎という先達なども数々いる。

これからの竹田は、これらの歴史や先達のあゆみに学びながら、東になって多くの人々の理解をえながら自己体力をつけ事にあたることこそ大切ではないかと思う昨今である。

パネルにもうかがえる。

お料理は九州・大分の味を感じさせてくれる、関あじ、関さばをはじめ、ひらめ、やりいかなどの活き活きした魚のおさしみ、おもむきを変えて煮魚、焼魚、なかでもとくに薦めは、生れて三十五年この道一筋と、おっしゃるところの天婦羅。

その日に仕入れた新鮮な素材を十二分に生かして、四季折々の味を感じさせてくれる。海老をはじめ東京湾のあなこ(これは簡単には手に入らないこと)ふきのとう・竹田のしいたけ等、どれもすばらしく美味しく、さらっとして、この揚げ具合は、生まれてはじめて味わうもので、流石自慢される



だけのことはある。食した人がぜひ又とファンになるのもうなずける。

お客様は常連の方が多く、お料理も御主人におまかせの様子、美味しそくに食べまた酒をいだだいている。このお酒はというと、麦焼酎「荒城の月」それに、ちくでんと屋号を入れてある。

これがまた、なかなかの評判とか！これについては、次のような逸話があった。「田舎はとにかくのんびりしているから、注文しても今田植で忙しいとか、また稲刈りで忙しいとか、言われてなかなか手に入りにくいので、大量に必要な時期などはかなり早めに注文している。」と、方言をまじえたお話に思わず故郷の情景が思い出されて笑いがこみあげてしまった。

奥様は、本当に明るくきさくな方で、飾らない雰囲気がお客様との会話の中に伝わってくる。時々口をはさまれるご主人、……そのとりあわせの妙が何

栄養クイズ

次の(一)の中に野菜・果物・魚・その他の食品名を入れて謎を完成しなさい。

- 1、(一) が赤くなると医者や青くなると。
- 2、(一) を食べれば医者要らず。
- 3、(一) が出ると医者が引っ込む。
- 4、(一) は朝の毒消し。
- 5、朝の(一) は金、昼は銀、夜は銅。
- 6、(一) は七里帰っても飲め。
- 7、(一) の茶は飲むな。

弁護士 伊東七五三八

(昭和20年卒)

事務所 〒104 中央区築地2-7-12
15山京ビル205

☎ 03-3543-8747

自宅 〒222 横浜市港北区大豆戸町11
☎ 045-531-7785

とも言えない。

ぜひ次回は、ランチタイムに伺って、天井・かき揚げ丼をいただいてみたいなどとお願いながら店をあとに……。

「故郷竹田のために何かお役にたてれば」とお話しされていたお二人の笑顔が、心に残った。

(広報委員 八木 洋子記)

豊後竹田の子守唄

あなたのご出身は? と聞かれて、竹田ですと答えると、ああ竹田の子守唄の竹田ねと言われ、あれは京都の竹田なんです。うちは大分県の竹田市でと説明した経験をお持ちの方も多いいと思います。我が郷土竹田にも子守唄があり、今でも伝える人ががんばっているというお話です。

この「豊後竹田の子守唄」を現代に蘇らせたのは、竹田市は下本町に住む橋本俊太郎氏(本年九十歳)。百貨卸・小売商を父親より受け継いだ橋本氏は、持ち前の商才とがんばりで事業を伸ばし、印刷業をも経営するようになり、南豊新聞を発刊しました。終戦後は事業を縮小し、新聞も廃刊となったのです。

最近の橋本俊太郎氏



が、竹田の文化発展に貢献されたことは言うまでもありません。その後、三味線と民謡を始められ、こちらも天分の才があつたのかめきめきと上達し、忽ち名人と呼ばれるようになりました。民謡教師となり、数十名の弟子を教えるかたわら、各地の民謡指導にも当たられました。

こうしたなかで、既成の唄に飽きたらなくなった橋本氏は、作曲・編曲にも手を染めるようになったのです。そこで竹田にも昔からあつた曲はなかったかなと思ひ立ち、微かな記憶とともに思ひ出されたのが、この「豊後竹田の子守唄」だったのです。

ただあまりはつきりとは覚えていなかったもので、町の古老を訪ねて歩き、一番良く覚えていた人に歌って頂き、それを三味線の符に起こしたそうです。これを弟子達に教え広めたところ、たまたま消防団の耳に入り、それまで市街地では、「荒城の月」のチャイムで時報をお知らせしてきたのを、昭和五十九年二月一日より午後九時の時報のみ、この「豊後竹田の子守唄」でお知らせするようになったのです。

さらに、竹田市ではあの洪水災害の教訓より、竹田と玉来を除く全家庭に有線放送を設置し、有事の際の備えとするとともに様々な行事のお知らせを行っていますが、その時報としても昨

年四月一日よりこの唄が流れるようになりました。

この子守唄は、なんとも不思議な曲なのですが、聴いているうちに懐かしいような、妙に耳馴染みの良いような気がしてきます。それは竹田弁のイントネーションが、そのまま唄になっていくからのような気がします。

橋本氏のお陰で、忘れ去られようとしていた竹田の文化が、一つ蘇ったのです。(広報委員 三尾 まゆみ記)

豊後竹田の子守歌

一、向こうの山の兎は

どうしてお耳が長いな
小さい時に乳うばか

耳をくわえて引っ張った
それでお耳が長いな

ネーネネネネネネンよ
ネーネネネネネネンよ

二、眠れ眠れ猫の子

伏つけ伏つけ兎の子
眠らんとオジモンが
連れに来るで

早よう眠れ猫の子
ネーネネネネネネンよ

ネーネネネネネネンよ
ネーネネネネネネンよ

三、坊はよい子じゃねえねしな

坊のお守はどこへ行た
あの山越えて里に行た
里の土産に何をもうた
起き上り小法師に笛太鼓

ネーネネネネネネンよ
ネーネネネネネネンよ

豊後竹田の子守歌



あとがき

▼臥牛8号をお届けいたします。今回から4月と10月に発行することにいたしました。しかし、私どもの不手際からとうとう5月になってしまいました。恥ずかしい限りです。

▼「同窓会報はどうあるべきか」と、毎号編集企画会の度に自問自答いたしました。良い答えは出てきません。でも、今回から「会員の語らい」を増やしました。このページの充実が、会報の意義に繋がるものではないかと思考したからです。

▼そこで、毎度のことながら「会員の語らい」の投稿を期待いたします。内容は問いませんが、次の項目を参考にして

ピアノバー

徳

丸

徳丸 和子

(昭37年卒)

中央区銀座8-5-18

森川ビル2F(アマンド2階)

電話(3571)1284

ただこればかりではと思っています。(近況・旅行記・趣味・ふるさと自慢・友達・恩師・先輩・後輩等の交友抄・日記抄・随筆・詩歌・家族・健康・高校時代・青春時代・勉強や遊び・好きな人・好きな場所・好きな店・好きな言葉・生きがい等々。17字詰めで60行・70行程度。)

送付先 足立五郎(〒227横浜緑区青葉台2-24-10)
▼「豊後竹田の子守歌」を三尾広報委員が取材し掲載することができました。忘れていた亡き母の歌声がよみがえります。総会でどなたか歌ってくださいませんか。(足立)